



機関広報担当の目からみた CAP2018

矢部 あずさ (JAXA)

1. CAP における機関広報

1.1 ESO の実例から

私は JAXA で宇宙科学の広報、特に報道・メディア対応を担当している。そのため、各機関の広報活動の具体的な実践例については特に興味深く、今後も情報共有の場を持ちたいと感じた。例えば、ESO の記者会見についてのトーク (Organizing ESO press conferences — what have we learnt?) は、直接的に参考になるものだった。科学成果についての公表は、雑誌によって報道解禁日時が設定されていることが多い。解禁が日本時間で深夜に設定されると、プレスリリースや記者会見のタイミングを大いに悩まされる。報道解禁を設定し限られた記者のみを招待した記者会見を行うか、報道解禁日時後にライブ中継を含めた記者会見を行うかの二択となる。ESO では記者会見を録画し、解禁時に公開するという方法も実践したとのことだが、残念ながら視聴者が生放送か否か混乱するなど、あまり良い結果が得られなかったというのは、興味深い話だった。自身の発表の準備不足や、聞きたいセッションの重複のために多くのセッションを聞き逃してしまったのが残念だった。

1.2 自身の発表—ASTRO-H の広報について

ASTRO-H は 2016 年 2 月に打ち上げられた日本で 6 番目の X 線天文衛星で、複数の海外機関との協力によって作上げられた。特に ASTRO-E と「すざく」に搭載しつつもその性能を発揮することが出来なかった「マイクロカロリメータ」への期待は大きく、関係者にとって 15 年越しの悲願ともいえるミッションだった。しかし、打ち上げから 1 か月後

の 2016 年 3 月に通信不通となり、4 月に運用断念に至った (この詳細は「異常事象調査報告書」を参照いただきたい)。私にとっても、着任後初の衛星打上げで思い入れもあり、異常事象発生後の報道対応も辛く苦しいものだったが、天文分野には珍しい危機管理の事態であり、国際ミッション、国内外の望遠鏡で観測していただいたこと等からこの発表をすることにした。

内容はマスメディア向けの報道対応の内容が主であり、社会の反応・反響を認知度調査や SNS 分析の結果等をもとに紹介した。今回の発表では自身で調査解析は行っておらず、認知度調査は JAXA の依頼による株式会社日本能率協会総合研究所の調査結果、SNS 上での反響はメルトウォーターでの調査結果に基づいている。

ASTRO-H の打上げについての認知度は打上げ 1 年前の段階では 2.3%、機体公開等一連のイベント後 (打上げ 1~2 か月前) の段階で 6.7% だった。通常衛星への注目が最も高まるのは打上げのタイミングではあるが、天文衛星の認知度の向上の難しさを感じた。ASTRO-H の場合、スペクトル観測で性能を発揮し、一般受けするような画像が撮影できるわけではなく、打ち上げ後の成果広報も課題と考えられていた。

異常事象発生 (3 月末) から、調査結果の報告 (6 月) まではほぼ毎週記者説明の場を設け、その時点で判明している事象について説明を行った。そうした機会に応じてツイート数は増えたが、中立的なツイートが 8 割で、ツイート数も打上げや探査機のイベントと比べると少ないものだった。打上げから約 1 年後となる 2016 年度の認知度調査では

ASTRO-H (衛星) の認知度は 21.1%で、異常事象についての認知度は 19.6%であった。これを高いとみるか、低いとみるかは個人によると思うが、「はやぶさ 2」の 9 割、「あかつき」の 5 割強に次ぐ認知度 (残りの比較対象は「ひので」「ERG」「BepiColombo」) だった。

2017 年度調査における「惑星、小惑星、月などへの探査機の開発」への支持が 59.3%、「宇宙の構造起源、進化を探るための科学衛星の開発」への支持が 51.3%、2018 年度調査における「未知の分野を解明する科学研究」の推進意向が 85.6%と、調査項目が異なるが、異常事象の前後で宇宙科学への支持はむしろ向上しているように見える。異常事象への対応が十分なものであったか、もしくは元々天文衛星への関心が高くはない (認知度の高い「はやぶさ 2」「あかつき」等への期待の反映) ためであったか等考えることができるが、その理由については現時点では考察できていない。

質疑応答で特に、反響があったのは ASTRO-H の愛称である「ひとみ」は人名に多く、「ひとみさん」のご家族からの苦言が多く寄せられたことについてだった。また、今後、ASTRO-H の知名度を上げたいかどうかという質問については想像していなかったものであり、新鮮だった。

2. バンケットの思い出

バンケットでは、日本・福岡ならではの演出や料理も良かったが、30 秒の制限時間で、向かい合わせとなった人と自己紹介をしてはローテーションをするという試みが印象的だった。天文学者らしい(?) 参加者の自由な行動に司会者も手を焼いていたが、限られた時間の中で多くの人と話をするきっかけができ、自身の発表を聞いていた方から感想を聞くこともできた。しかし、30 秒という時間は

短く、後に会話をするにも、バンケットの終盤で行われたのが勿体なかった! はじめにアイスブレイクとして実施されれば良かったと思う。

3. SNS 活用の正と負の面

CAP2018 のタグへの投稿が活発で、実況のようなツイートも多く、参加できなかったセッションの内容を知ることができたり、自分の発表についてのツイートにモチベーションが上がったりした。一方で懸念として、個々人の配慮にもよるのだと思うが、SNS 投稿のレギュレーション等の案内が無かった、もしくは不十分だったのではないと思う。撮影が許可されているのか疑問な写真や、不適切な (引用やクレジット表記等が無い) スライドの拡散等が見られた。Twitter の投稿が盛り上がり「トレンド入り」した時間もあったと思うが、コミュニケーションツールを通じて負のメッセージも簡単に伝わる以上、天文教育・コミュニケーションに携わる人たちが集まる会議として不安・残念に感じた。

4. 終わりに

オープニングの場では「はやぶさ」とそのアウトリーチに話が及び、バンケット等の場でも自己紹介をすると「はやぶさ 2」についての感想や要望をいただいた。広報・アウトリーチの広がりには当事者による直接的なものだけでなく、多くの方の手を借りて行うものであり、今後も国内外で「題材に使ってもらえる」広報を実施していきたい。



矢部 あずさ